慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スタンダールの『ポーリーヌ宛て書簡』
Sub Title	Lettres de Stendhal à Pauline
Author	岡野, 淑乃(Okano, Yoshino)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.68, (1995. 5) ,p.165(62)- 183(44)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00680001-0183

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スタンダールの『ポーリーヌ宛て書簡』

岡　野　淑　乃

スタンダールの書簡は，小説や日記，自伝的作品群の研究を助ける上で，つまりスタンダールについての伝記的興味の対象として，主に研究されてきた。例えば，H・マルチノーらスタンダール伝の著者は，1800年代パリに上京したスタンダールが，妹や友人に宛てた書簡を，青年期スタンダールの思想と行動を知る手掛かりとして重要に扱ってきた。確かに，小説を書く以前のスタンダールを知るにあたって，書簡は重要な資料であるに相違ないが，日記を詳しく綴る習慣のあったスタンダールが，全く同じ時期に同じような事柄について，日記と手紙の両方を残していることを考えると，書簡は日記とは又異なる使命を負わされていたに違いない。妹ポーリーヌに宛てた書簡の中で，書簡の持つ2つの役割として，スタンダールは，こう述べている。

> Comment t'amuses-tu ? Vas-tu quelquefois à Claix ?
> Réponds-moi, je t'en supplie ; cela aura deux buts : le premier, de me faire beaucoup de plaisir, le deuxième de te former le style.[1]

第一の，相手を喜ばせるというコミュニケーションの手段としての書簡の役割を考えた時，日記との最も大きな違いである，明らかに前提とされる読者の存在が，クローズアップされる。そして書簡第二の役割もやはり，読者に理解されるように書くという自覚と結びつくだろう。スタンダールの日記に特有の暗号めいた走り書きは，手紙には許されない。このようにスタンダールにとって，読者を意識した「書簡」は，文体の鍛練の場

であると同時に，その効果を意識する場として，小説を始めとする「作品」に近いものとして考えることができる。それでは，読者ポーリーヌはスタンダールにとって，どのような存在であっただろうか。言い換えれば，ポーリーヌを読者に持つことによって，『ポーリーヌ宛て書簡』はどのような作品になったのか。本論は，スタンダールの書簡の中で特に1800年代に集中する妹ポーリーヌ宛ての書簡を一つのまとまりとして捉え，内容の進展に沿って一種の教育書簡小説として読むことを試みるものである[(2)]。

スタンダールは書簡文学の愛好者であった。『ペルシャ人の手紙』『新エロイーズ』『危険な関係』『ウェルテル』等，18世紀の代表的書簡体小説はもちろん，ル・ブロスの『イタリア紀行』や，セヴィニエ夫人，ディドロ，ミラボー，アンリIV世の書簡等についても，絶えず言及しているし，17世紀ギユラグの『ポルトガル文』を恋愛の最もすばらしい例として強調していたことは周知のとおりである[(3)]。『ポルトガル文』は1960年代のJ・シュポーによる研究発表まで[(4)]，実在の修道女の書いた書簡とされてきたのだから，自分の胸をうつ書簡が小説として書かれたものか，実際に交わされた書簡かということは彼の好みや価値判断にあまり影響を与えなかったようだ。書簡文学におけるこれほどの読書量が，スタンダールに影響を与えなかったとは考えられない。1804年6月20日の文学日記においてスタンダールは，このように言っている。

> J'ai une chose naturelle, c'est d'écrire sans m'en douter et malgré moi dans le style de l'auteur que je viens de lire. [(5)]

他人の文体を意識的に真似るのではないが，読書がそのまま自己の文体に結びつき，知らず知らずのうちに消化してしまう。スタンダールが，いわゆる書簡体小説を書かなかっったのは，この18世紀的小説技法に限界を感じたとも言えるだろうが，書簡文学としては結果的に『ポーリーヌ宛て

書簡』を残している。これを1つの作品として見ることは，むしろ自然である。なぜなら，ディドロのソフィ宛て書簡のように，ディドロの作品としてまとめるためにソフィからの書簡を排除するまでもなく[6]，ポーリーヌとの文通は，ポーリーヌからの返事はほとんど存在しないも同然の，demi-correspondance であったからである。また，初期のポーリーヌ宛て書簡に集中して展開される手紙論もリチャードソンやマリヴォーらの独唱型書簡体小説における主人公＝エピストリエ達の手紙に対するこだわりを思い起こさせる[7]。

ポーリーヌは読者であると同時に，女主人公として存在する。存在するというよりは，作られ存在させられたと言うこともできる。スタンダールの多くの小説の中で，「教育」の問題が大きな位置を占めていることについては，ここで語るまでもないが，ポーリーヌは既に青年スタンダールによって，後の女主人公たちのひな型としての教育を受けていたのである。

それでは，まず女主人公ポーリーヌの人となり，言い換えればその人物設定を確認してみよう。ポーリーヌは1786年3月21日グルノーブルに，スタンダールの3歳年下の妹として生まれ，22歳でフランソワ＝ダニエル・ラグランジュと結婚した。『スタンダール小辞典』によれば[8]，スタンダールは，このお気に入りの妹の，趣味を形成したり，しっかりした文学教育を授けることに努め，彼の考えによる「本物の女性」を作り上げようとした。ここで筆者マルチノーはポーリーヌの「当世流行のウェルテリスム」に触れている。このポーリーヌの倦怠病は，兄と妹の共通点として2人を結び付けるものであると同時に，サン・プルーからウェルテルへと連なる書簡小説の主人公たちの系譜，そしてスタンダールの後の主人公たちの人物設定を我々に思い起こさせる。まずスタンダールは1801年12月の日記で，自分自身について，こう言っている。

> D'après une conversation que je viens d'avoir avec M. Depetas, que je crois excellent médecin, il paraît que ma maladie habituelle est l'ennui. Beaucoup d'exercice, beaucoup de travaux, et jamais de

solitude, me guériront. Je crois que je ferai bien toute ma vie d'agir beaucoup.[9]

ポーリーヌに宛てた書簡にも，ポーリーヌのメランコリーを心配し，この「病」への対処の仕方についての指示が，頻繁に登場する。1804年6月10日の手紙には，[10]《il faut remuer le corps quand on est ennuyé》《Je te conseille de te fatiguer quelque fois, de faire une lieue ou deux, voilà le seul chemin pour sortir d'ennui》といった，身体的解決策が散見される。これは，先に引用した日記において自分に言い聞かせていることと共通している。しかし運動と同様に同じ手紙で繰り返し提示されるのは，「手紙」である。《je t'écrirai tous les deux jours pour te distraire》[11]［お前の気をまぎらすために」手紙を書くと言うのであるから，ポーリーヌを倦怠から救うということがスタンダールのポーリーヌ宛て書簡の目的のひとつとして提示されていると言える。スタンダールの後の女主人公たちも，自己を取り巻く環境への違和感から倦怠を感じることが多い。オクターブ，ファブリスら男性主人公たちにおいては，その違和感が劣等感やひけめとして発展しやすいのに対し，女主人公たちは，幅広い読書という自己教育手段を用いて運命を切り開く力強さがある[12]。女主人公たちを倦怠から救う読書と，ポーリーヌを倦怠から救おうとする兄からの手紙はここで同じ役割を担っている。スタンダールのポーリーヌあて書簡は，その内容として読書を勧める一方で，作品としても読者ポーリーヌに書物との出会いと同様の効果を与える。端的に言えば，スタンダールの手紙はその意味において一冊の書物に他ならない。

それではスタンダールが書簡を通じてポーリーヌに施した教育を見てみよう。スタンダールは，ポーリーヌが世間の平凡で退屈な娘たちの教育，靴下編みなどの単調な手仕事で1日を過ごすことは望まなかった。

quand tu auras passé deux h[eures] à tricoter, pendant ce temps tu aurais lu deux cent cinquante pages d'un livre utile, et quelle

différence !(13)

具体的には「感じの好い女性」(femme charmante) であるだけでなく,「熟考する」(réfléchir) 習慣を身につけること(14), つまり男性よりよく思考することを目標にさせた(15)。

スタンダールのフェミニスムについては, 女主人公たちが男性によって限定されない自分自身の運命を持っているという点, 障害を切り抜けて自由を純粋に保持するという点を, 代表的な女主人公を例にとって検証しているボーヴォアールの『第二の性』(16), バルザックとの比較で論じているR・ボルステールの『スタンダール, バルザック, ロマン主義のフェミニスム』(17), スタンダールのフェミニスムの凝縮した形としてラミエルを取り上げ, 細かく検討しているG・メイの研究(18)などが代表的なものである。その中でボルステールは, スタンダールには, バルザックに較べて姦通をテーマにした作品が少ないと指摘しているが(19), 事実, スタンダールの世界では社会的に反抗するのはむしろ独身の女性が多い。その点でも, ポーリーヌがスタンダールのヒロインとして教育されたことは暗示的である。もう一点ポーリーヌには, スタンダールの imagination と何らかの関わりを持っていたと思われる個性があった。ポーリーヌは長い間, 「ちょっと馬鹿な田舎娘」としてスタンダール研究者たちによって扱われてきたが(20), まずP・アルブレ(21), そしてA・ドワイヨン(22)の論文によって, 結婚後まで変わらなかった男装癖や, 女友達との親密な交際, そして, そうしたポーリーヌに宛てたスタンダールの忠告なども検証された。スタンダール自身, ポーリーヌの手紙の中に, 男性的精神を確認している(23)。その「男性的で逞しい精神」(esprit mâle et vigoureux) にスタンダールは, 魅惑されている。男装趣味と, 男性的強靭な精神を同一視することはできないが, いわゆる《変装》, そして《女性らしさの意識的抹殺》,《男勝りの強い個性》という点では, 後の女主人公たちとポーリーヌの共通点を改めて確認しないわけにはいかないだろう。スタンダールの小説において男装, 或いは変装する女性たちは概して, 目的のためには手段

を選ばぬ強い意志の持ち主である。例えば，女性的印象を与える内気で虚弱な美少年であるジュリアンのはにかみに対して，マチルドの手紙の使い方やその行動力は，男性的と表現できるだろう[24]。スタンダールは，先に見てきたように，ポーリーヌに男性と同じような教育を授け，男性と同様の判断力を養うことを目指し，又，自己の想像力の分野においても，若い頃，不実な恋人を追うために男装を厭わぬ娘を主人公とした芝居を見て，感動したことを記している。それにもかかわらず，一方ではポーリーヌに対してその男装癖や《passion secrète》を繰り返し諌め，偽善的な姿勢をとることを勧めている。男性よりよく思考する，思慮深い女性を作るという理想的教育を施す一方で，ポーリーヌへの忠告には，スタンダールが，女性の社会的成功にも重きをおいた節がうかがえる。それは社会的成功のためには，偽善を厭わぬ方針であり，ポーリーヌへの結婚のすすめは，分かりやすい一例である。

> il ne faut pas, pour ton bonheur, que tu épouses un homme dont tu serais amoureuse ; en voici la raison : tout amour finit, quelque violent qu'il ait été, et le plus violent plus promptement que les autres. Après l'amour, vient le dégoût ; rien de plus naturel ; alors, on se fuit pour quelque temps. Voilà qui va bien ; mais, si l'on est marié, on est obligé d'être ensemble, on est surpris de ne plus trouver que l'ennui dans mille petites choses qui faisaient le bonheur.[25]

このような，はなはだ冷めた理性的な意見，忠告は，どんどんエスカレートし，1804年8月の手紙には，条件も具体的に，こう言いきっている。

> Que diable fais-tu donc ? es-tu amoureuse ? Grande folie ! Prends garde à te marier par amour ; à moins que tu n'épouses un hom[me] de beaucoup d'esprit, tu ne seras pas heureuse. Si j'étais

toi, je prendrais un honnête homme, bien riche, moins spirituel que toi.[26]

その他，同様な例としては，同じ年の8月29日の手紙において，恋愛結婚の完全な否定を行い，サン・プルーについても，「あくまでも想像上の人物」と述べている。これは情熱恋愛を理想とし，『新エロイーズ』を愛読，更には自らの恋する姿をサン・プルーになぞらえているスタンダール[27]が，妹ポーリーヌの教育においては，むしろメルトゥユ夫人を手本にしているように見える点で注目できる。この理想的教育と偽善のすすめという2つの教育は，ポーリーヌ宛て書簡において，どう両立していくのか。『危険な関係』は，スタンダールにとって，社会的行動，外的表現の方法を学ぶのに役立つ教育小説であったと言えないだろうか。

1805年2月6日の日記の中で，スタンダールは，いやな法則をうまく切り抜けるためにマキャヴェリのとった2つの方法を書き記している。一つは，力に訴えても免れる。もう一つは，従うように見せかけて免れる方法である[28]。スタンダール的に考えると，力のない女性は，まさしくこの2つめの方法を用い策略に身を委ねなければいけない。

Mais rappelle-toi que le premier bien d'une femme est la réputation et que, si tu choques la vanité des autres, ils t'en puniront en te diffamant : cache donc ta science et sois plus douce qu'une autre pour racheter les moments d'oubli ou tu aurais montré tout ce que tu sais.[29]

女性にとって，評判がいかに大切であるかを説くこの一節はまさにメルトゥイユ夫人の哲学に通じる。『危険な関係』の81番めの手紙においてメルトゥイユ夫人は，どのように事件や世評を自在に駆使して，自己の評判を土つかずのままに保ったかということを告白している[30]。

メルトゥイユ夫人のこの哲学は，女性が，observer（観察），réfléchir

(熟考) によって自らのscience (哲学) を獲得し，世間における理想的な自らの立場というものを作り上げるという点で，ポーリーヌ宛て書簡を経て，ラミエルら女主人公たちの教育へと連なるものである。自己の置かれた環境や，社会に対する違和感，そしてそられについての経験と観察。しかし，メルトゥイユ夫人の哲学にあって，スタンダールの女主人公たち(ポーリーヌを含む) に欠けるもの，それは，周到さ，用心深さである。「用心のために決して手紙は書かぬ」というメルトゥイユ夫人流は，マチルドにはもちろん，ラミエルにも欠けている。そこに登場するのは，一風変わった教育者サンファン医師であり，社会での身の置き方を，既にパリで学んだと自負する兄スタンダールであった。1804年10月29日から11月16日にかけての長い手紙では，スタンダール自身がこのfolieを治すのに大変苦しんだ経験からいって，同じように書物による教育を受けたポーリーヌに，一生の不幸となるような同じ過ちを繰り返させたくない。男性にとっては何でもなくとも女性にとっては取り返しのつかないほど名誉を台無しにしてしまうのだと語っている(31)。後のスタンダールの女主人公たちに連なる女性像の一つの典型が、この時期既にポーリーヌ宛て書簡に現れていることを確認すると同時に，女性としての一つの理想と，自己の分身への期待が，スタンダールの内部において複雑な均衡を保っていた様子が伺える。1807年3月の手紙には，兄スタンダールの出したポーリーヌの将来についての忠告がこのように結論付けられている。「第一に，結婚しなければいけない。」，「第二に，善良で，お金持ちの男と結婚しなければいけない。」，そして「スカパンの道徳を思い浮かべ」ること，「結婚の中に愛情のほとばしりを求めてはいけない。」(32)，そして，「結婚する時には，偽善者にならなければいけない。」(33)と言い切っている。

スタンダールにとって，社会に反抗するためのPetites Comédies nécessaires (必要に応じて演じるという行為) と言ったものは，決して否定的なものではない。スタンダール自身，その時代の恋人メラニーへの自らの恋を，「演じられた情熱」と定義している(34)。

スタンダールがポーリーヌ宛て書簡で提案していた，恋人メラニーとス

タンダール，そしてポーリーヌで構成する書簡連合，更にポーリーヌの未来の夫を加えた四者による，新エロイーズ的ユートピア構想も，登場人物たちの演技によって初めて成り立つ作品としての筋書きのひとつであっただろう。

『新エロイーズ』は，最愛の人をおいて旅にでる主人公サン・プルーの見聞録として，すなわち旅先からの風景描写と心理描写[35]，ある異国の風俗が，その国や地方の人々の性格に与える影響の分析[36]など『ポーリーヌ宛て書簡』に直接的影響を与えていることは明らかであるが[37]，ここでは，スタンダールがポーリーヌに執拗に提案を繰り返す共同生活の思想のもととなるユートピア願望に注目したい。

> J'aurais bien besoin de toi ici, ma chère Pauline: il y a des moments où l'âme, dégoûtée du travail, cherche à aimer, s'attache de plus en plus aux objets de son affection, se renferme dans eux et voudrait pour tout au monde être auprès d'eux. Je suis, depuis plusieurs jours, dans cet accès de sentiment qui ne revient que trop souvent pour mon bonheur. Tant que l'âme est froide ou médiocrement agitée, Paris est la ville du bonheur; mais, dès qu'elle redevient tendre, je regrette Grenoble, tout ennuyeux qu'il est. Que ne puis-je te voir ici avec une autre personne !(38)

パリでの生活に疲れた時，スタンダールにはポーリーヌが必要になる。ここでは，パリとグルノーブルのどちらも彼にとっては安住の地ではなく，その精神の状態によって評価の変わる不安定な場所である。仕事にうんざりした状態で，心は愛情の対象に向かい，愛したいという欲望が彼にとりつく。「ポーリーヌと一緒にいられたら」という曖昧な感情がよりはっきりした提案として形作られるようになるには，メラニーの登場を待たねばならない。

Si tu n'as pas assez d'argent pour partir, le remède est tout simple : viens apprendre la banque avec moi à M[arseille] ; il y a ici vingt femmes qui tiennent des maisons, et qui, en cinq ou six heures d'un travail moins pénible qu'un bal gagnent quinze ou vingt mille livres. Tu feras comme elles, et tu jouiras en même temps de cette liberté que tu désires tant, et des charmes de la plus aimable société. La liberté est ici à son comble ; ce pays te convient ; je ne conçois pas comment tu ne prends pas la poste. Tu es faite pour y avoir tout le succès possible, et c'est vraiment (pour parler les termes de notre état futur) le local où tu peux établir avec le plus d'avantages la manufacture de bonheur.(39)

例えば，上記の1805年4月の手紙では，パリでの生活への誘いとして，お金と自由と，manufacture de bonheur を築くという夢を語っている。4日後には又，たたみかけるような誘いの手紙を書き，自分の運命を切り開けるパリの魅力を力説している。

Viens à Paris, et je me charge de ton bonheur. Ne te figure pas Paris sur la description des *secs* et sur la critique des environs, Paris est le lieu du monde où chacun fait le plus son sort : avec de l'argent et de la gaieté dans le caractère, et une bonté aimable, on y est tout ce que l'on veut.(40)

「お前の幸せは僕が引き受けよう」という台詞には，スタンダールの兄としての愛情と自信が窺えるだろう。

メラニーとの関係が絶頂にある時期の書簡には，真にユートピア的ともいえるメッセージが続く。

Le bonheur vient de nous-mêmes, la position n'y fait presque

rien. J'ai bien des choses à te dire là-dessus, actuellement que je suis assuré de ce caractère courageux et de cette âme sublime que je ne faisais qu'espérer il y a un an. Tu verras ma vie. Nous chercherons ensemble des moyens de bonheur. Je crois qu'en nous corrigeant de quelques défauts et en nous procurant une fortune indépendante, nous le trouverons[41]

「幸福への道を一緒に探していこう。」というこの手紙は，22歳のスタンダールが19歳のポーリーヌに宛てたことを割り引いて読むにしても，ずいぶんな若さと自信に満ちた調子に驚かされてしまう。メラニーと共に幸福の絶頂にあってもポーリーヌのことを忘れているわけではない。メラニーは，兄スタンダールと共にポーリーヌが幸せでないことを心配し，ポーリーヌのことを愛しく思っている。メラニーはポーリーヌと同じような感じ方をすると彼は繰り返す。そして，これからは，自分たち（メラニーと自分）2人に手紙を書くようにと書簡連合のようなものを提案するに到る[42]。

そして同じ手紙で，メラニーと自分，ポーリーヌとマント四人の共同生活の提案も行う。

Quand pourrons-nous vivre, toi, Mél[anie], ma fille, moi, [Mante], ensemble à Paris ? Oh ! que nous serions heureux, ma bonne Pauline. Je voullrais [*sic*] bien que tu te mariasses, [Mante] par exemple. Que dirais-tu de cela si nous pouvions l'arranger ?[43]

メラニーは，ポーリーヌとより親しくなりたいと願っているし，メラニーとポーリーヌの《âmes》は，似ているから必ず二人は，愛し愛される仲になると彼は確信している[44]。

C'est M[élanie] qui a eu avant-hier l'idée que pourrais bien un jour l'épouser. C'est un excellent homme, et la fortune convient, et il passera sa vie avec moi.(45)

共同生活についての提案は，常にメラニーとポーリーヌ相互の手紙のやりとりを示唆する。そこにも，愛情と友情が多方向に交錯しあう新エロイーズ的要素が確認できる。しかし，『新エロイーズ』と『ポーリーヌ宛て書簡』における主要な登場人物を比較すると，後者の主人公らの役割分担が非常に曖昧であることがわかる。スタンダールの役はもちろん自ら度々ほのめかすように，主人公サン・プルーである。恋人メラニーは，同棲中であるから，手紙を書く必要がなく，手紙はポーリーヌに宛てて書かれている。スタンダールはポーリーヌに，メラニーの友人になってくれるようにと頼む。ポーリーヌは恋人ジュリーであるかのようにも見えるが，兄スタンダールの伴侶にはなりえず，恋人メラニーのことを聞かされる聞き手であり，スタンダールの思惑どおりに運べば，メラニーの良き友人として，兄サン・プルーに対して，絶対の信頼と好意を抱きつつも女友達のために奔走するクレールの役にあてはまる(46)。ポーリーヌの相手には，平凡でお金持ちの男であれば誰でもいいと，彼は考えた。J・ルッセ流に言えば，ポーリーヌは，共同生活構想の中で protagoniste スタンダールに対して全くの confidente の役を担わされている(47)。「交響的作品（œuvre symphonique）の代表格として挙げられる『新エロイーズ』に対して，スタンダールのポーリーヌ宛て書簡は，ほとんどが一方通行であること，又，『新エロイーズ』についてスタンダールが語るとき，作者ルソーと，ジュリー，サン・プルーのカップルが中心で，クレールやヴォルマールはその背後で一切の自己主張を捨て去ってしまったかのように見える点が特徴的である。ユートピアの中心は，メラニーと自分であり，自己主張しないポーリーヌは，スタンダール好みの魂を持つ疑似恋人でありながら，妹であるために confidente にされてしまう。ポーリーヌの相手は名前さえ滅多にあがらず確定されていない不安定要素で，まして好意的にその

「魂」が論じられることはない。

このことは，手紙の受け取り手ポーリーヌに対するスタンダールの姿勢を明らかにする手掛かりにはならないか。スタンダールにとってポーリーヌは，文通の相手として決して対等ではありえず，あくまでも彼によって作られ，彼によって葬られる主人公兼読者であった。なぜならスタンダールの言うところの「感じやすい魂」でさえ，兄スタンダールによって発掘，評価され，存在が記されなければその値が得られない相対的なものだからである。この点スタンダールはポーリーヌにとって全能の神であり，即ち作者に他ならない。兄の言うとおりに結婚することにより，その主人公としての役割を半ば終え，結婚が不幸な結末を迎えて一緒に暮らすようになると，手紙の読者としての役割も失い，「カキのようにまとわりつく」と，最愛の兄に酷評されるに到る(48)。

美しい感じやすい魂の持ち主であると兄に評価されていたポーリーヌが女主人公として完成されていなかっったのは，まず完全に男女を逆転してしまえるような存在，自分から文通を仕掛け，運命を切り開く作家の側になれなかった点である(49)。

兄の意に従ったが幸福にはなれず，兄の作品から独立するには運命を切り開く才能と力強さが足りず，言ってみればポーリーヌは，スタンダールの失敗作であり，『ポーリーヌ宛て書簡』をスタンダールが未完のまま放り出したのは，生活を共にするようになり，書く必然性が失われたと同時に，主人公としてのポーリーヌに限界を感じたからでもあろう。『ポーリーヌ宛て書簡』はスタンダールにとって，書簡である故に，情熱を演じるのに相応しいものであり，相手の不在という状態（l'effet de l'absence）が自己の内省を導き，それを自己の理解者である不在の相手に語ることができるものであった。書簡がこの時代のスタンダールのエクリチュールという活動の一つの契機であり，手紙のエクリチュールによって又，青年スタンダールが存在していた。共同生活の核となるメラニーとの関係に退屈した彼は，自分を悲しみから救えるのはポーリーヌしかいないと断言する(50)。これに，『ポーリーヌ宛て書簡』がスタンダールの文学創造の第一

歩であると言う，今までみてきた考察を重ね合わせると，彼を悲しみの状態から引き出すことができるのは『ポーリーヌ宛て書簡』によって鍛えた「書く」という創造行為だけだと読みかえることができるのではないか。

註

（1） *Correspondance* Préface par V. Del Litto, édition établie et annotée par H. Martineau et V. Del Litto, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Tome I.（以下 CI と表記）p. 5 lettre 4 1800年 4 月「暇な時は何をしているの。時々はクレに行くのかい。返事を書いておくれ。それには二つの目的がある。ひとつは僕を大いに喜ばせるため。ふたつめは，お前の文体を形成するためだ。」

（2） Pléiade 版『書簡集』にはポーリーヌ宛ての手紙が281通，ポーリーヌからの返事が 9 通収録されている。

（3） 1805年 1 月15日の日記には『ポルトガル文』『アベラールとエロイーズの手紙』を情熱的な恋愛を描写した手紙として引用し，後の『恋愛論』の冒頭を思わせる展開となっている。『恋愛論』においても，情熱恋愛を代表する文学作品として挙げられた作品がすべて書簡文学であることは注目できる。

（4） *J. CHUPEAU : "Vanel et l'énigme des lettres portugaise" Revue d'histoire littéraire de la France 1968, pp. 221-228, "Remarques sur la genèse des《Lettres Portugaises》" Revue d'histoire littéraire de la France 1969, pp506-524.*

（5） *Journal Littéraire*（Oeuvres complètes de Stendhal, publiées sous la direction de Victor Del Litto et Ernest Abravanel, Genève, Cercle de Bibliophile, 1967à1974. Tome33）p. 388. 1804年 6 月20日。
「僕にとっては，1つの自然な事柄がある。それは，自分でも気づかないうちに，そして無意識に，読んだばかりの書物の著者の文体で書くということだ。」

（6） ディドロのソフィ宛て書簡については，J. プルースト，鷲見洋一両先生の研究を参照されたい。

（7） 例えば，CI p. 3 lettre 3, CI pp. 25-26 lettre 19, CI p. 36 lettre 25, CI p. 68 lettre 41, CI p. 97 lettre 56を参照。
マリアンヌやパミラは，手紙を書きながら，文体について意識したり言及したりと，「手紙の文体」というものについての関心が強かったことを思い出してみよう。スタンダールが『ポーリーヌ宛て書簡』において文体論と同時に，他人に盗み読まれるのではないかという，文

通の守秘性についての危機感を強調していることも又，リチャードソンらの書簡小説のスリルに通じる。又，いつか二人で読み返すために，書簡を必ず大切に保管してほしいとポーリーヌに頼んでいることも，スタンダールがこの書簡を自分の作品として残す意図があったことを示している。

(8) H. MARTINEAU: *Petit Dictionnaire Stendhalien*, 1948, Divan, Paris. ポーリーヌとスタンダールの具体的な関係については岩本和子氏の論文『アンリ・ベールとその妹ポーリーヌ』流域35号1993年　青山社 pp. 54-64があるので，ここでは踏みこまない。

(9) *Oeuvres Intimes* Tome I, 以下 OI と表記 Edition établie par V. Del Litto. Bibliothèque de la Pléiade. Gallimard. 1981. pp31-32.「デペタス氏はすぐれた医者だと思う。彼としてきた話によると，私のなじみの病気は倦怠であるようだ。大いに運動し，大いに勉強して，決して孤独にならぬことが私の病を癒すだろう。これからも活発に行動するのがよいようだ。」

(10) CI. pp. 100-102 lettre 58 1804年 6 月10日
「退屈している時は，身体を動かさなければならない。」「僕はお前に，時折身体をくたびれさせること，1 里か 2 里の散歩をすることを勧めよう。これが倦怠から抜け出す唯一の道だ。」

(11) 同,「僕はお前の気を晴らすために 2 日毎に手紙を書こう」

(12) ファブリスやオクターヴは，他の青年にはあって自分にはない感情（と思っている）についての劣等感やそれによって引き起こされる無気力が見られるが，同じくその感情に欠けるラミエルは，自己の特質に，引け目を感じることがない。ジュリアンの，出自に対する劣等感も，同様の下層出身のラミエルは持つことのない感情である。

(13) CI. p. 4 lettre 3 1800年 4 月10日
「たとえば，お前が 2 時間編み物をして過ごすとすると，この時間に有益な本を250ページ読むことができるだろう。何という隔たりだろう。」

(14) CI. p. 38 lettre 27 1802年 8 月22日

Je te dirai ma manière de voir et j'espère que tu sentiras de la même manière. Il y a en toi de quoi faire une femme charmante, mais il faut t'accoutumer à réfléchir. Voilà le grand secret.

(15) CI. p. 4 lettre 3 1800年 4 月10日

Je crois qu'en prenant quatre ou cinq leçons par décade, cela coûterait 6 ou 9 fr. par mois, et au bout de six mois, pour une quarantaine de francs, tu aurais appris à raisonner mieux que

bien des hommes.

(16) Simone de BEAUVOIR : *La Deuxième Sexe*. Gallimard, Paris, 1949.

(17) R.BOLSTER : *Stendhal, Balzac et le féminisme romantique*, Minard, Paris 1970

(18) G.MAY : "Le féminisme de Stendhal et Lamiel", *Stendhal Club* 1978 pp. 191-203

(19) op. cit. chap. III, p. 85

(20) H. マルチノー，Y. デュ・パルクら。これらの研究の概要については，A. DOYON : "Henri et Pauline Beyle, Histoire de la 《cara sorella》 (D'après des documents inédits) I-IV" *Stendhal Club* no93-97 1981-1982に詳しい。

(21) P. ARBELET : "Stendhal en famille" chap. I, 《La soeur de Stendhal》 dans *Soirée du Stendhal Club.*

(22) A. DOYEN op. cit.

(23) CI p. 95 lettre 56 1804年 6 月 7 日

(24) この点に関しては，R. ボルステールがマチルドのジュリアンに宛てた第二部の手紙群を『新エロイーズ』のパロディとして捉えている。又，マチルドが手紙によって踏み出した第一歩について，『危険な関係』のメルトゥイユ夫人のヴァルモンに対する態度と共通する"Masculinité"と定義している。それは彼女がコンタクトを開いたという行為の自発性による。そして逆に，ジュリアンのマチルドに宛てた手紙については，女性的慎重さ（prudence féminine）と定義している。

(25) 「お前の幸せのためには，恋する相手と結婚してはいけないよ。理由はこうだ。どんな恋も冷める。それがどんなに激しい恋でも。そして最も激しい恋は，最もはやく冷める。恋の後には幻滅が来る。こんな自然なことはない。しばらくの間逃げだす。そうすれば，よくなるだろう。しかし結婚していたら，一緒にいなければならない。以前は幸福を形作っていた多くの細々とした事柄にもはや退屈しか見いださないことに驚かされるだろう。」CI. p. 107 lettre 60 1804年 6 月20日

(26) 「何てことだ。お前が恋をしているだって。何て気狂い沙汰だ。恋に駆られて結婚するのは用心しなければいけない。機知に富んだ男と結婚しなければ，お前は幸せにはならないよ。僕がもしお前だったら，誠実で，金持ちで，お前ほどは才気煥発でない男と結婚するだろう」CI p. 140 lettre 70 1804年 8 月 8 日

(27) OI 1 p. 272 1805年 3 月17日

Arrivés chez elle, elle s'habilla. Je suis trop chaste dans ces occasions. C'est que je suis toujours S[ain]t-Preux. Nous allâmes

aux Tuileries. J'ai peu de souvenirs, parce que je ne me voyais pas parler ;

(28) OI 1 p. 203 1805年 2 月 6 日

Le Prince de Machiavel met sur la voie de la science qui apprend à éluder ces lois. Sur quoi il se présente deux manières :

1° Les éviter à force ouverte ;

2° Les éviter en paraissant s'y soumettre.

(29) 「しかし，女にとって一番貴重な財産は，世間の評判だということ，もしお前が他人の虚栄心を傷つけたら，彼らはお前を中傷によって罰しようとするだろうということを覚えておかなければいけないよ。だからお前の哲学を隠すこと。よその女よりも穏やかにすること。そうすれば，お前が知っていることのすべてを見せてしまったようなうっかりした瞬間を補うことができる。」

CI pp. 93-94 lettre 55 1804年 5 月11日

(30) Laclos : *Liaisons Dangereuses* lettre 81

《Mais moi, qu'ai-je de commun avec ces femmes》以下《Je ne me trouvais encore qu'aux premiers éléments de la science que je voulais acquérir.》まで。まだ幼い時分から，いかに意識的に science を身につけ，しかしそれを外に見せないことによって評判を維持してきたか，そのためには，observer すること，réfléchir することを重要視したことを語り，自己を，自分の作品であるとまで言い切っている≪je puis dire que je suis mon ouvrage.≫

CI pp. 93-94 lettre 55 1804年 5 月11日

(31) CI p. 162 lettre 78 1804年10月29日—11月16日

Le hasard m'a fait bavarder sur cette folie dont j'ai eu tant de peine à me guérir, si tant est que je le sois, et comme tu te donnes la même éducation que moi, celle des livres, j'ai voulu te prévenir contre une erreur qui peut faire ton malheur éternel. Les erreurs des hom[mes] sont sans conséquence dans ce genre-la, celles des femmes les déshonorent à jamais ; regarde cette pauvre V[ictorine] B[igillion].

(32) CI p. 343 lettre 151 1807年 3 月24日

En résultat,

1° Il faut se marier ;

2° A un homme bon et assez riche.

Mais ne cherche pas de transports dans le mariage ; souviens-toi de la morale de Scapin.

(33) 同上
A l'époque de ton mariage, il faut devenir hypocrite ;

(34) OI 1. p. 214 1805年2月11日

(35) 具体例としては，例えば，『新エロイーズ』のlettreXXIII と1801年3月9日のポーリーヌ宛て書簡を比較してみよう。情景を形作る大きな舞台装置と言えるアルプスの山々の存在に加え，《les nuages》《les tonnerres》《l'orage》《la tempête》といったイメージの複合体である《l'atmosphère》が共通し，これらの壮大な《paysage》を《spectacle》として感嘆している点も共通している。

(36) 『ポーリーヌ宛書簡』における「旅先では，その住民を観察するのが楽しみである」という記述も，明らかにサン・プルーのヴァレー人についての記述を意識していると思われる。
CI pp.20-21 lettre 15

(37) 『書簡』『日記』『文学日記』において，『新エロイーズ』の文体や，物語展開について度々批評を加えていることから，作品創造の上での一種の反面教師の役割も無視できない。

(38) CI pp. 145-146 lettre 72 1804年8月21日

(39) CI p. 189 lettre 86 1805年4月15日

(40) CI p. 195 lettre 87 1805年4月19日

(41) CI p. 197 lettre 88 1805年4月29日
「幸福は，我々のうちから出てくるもので，置かれている状況はほとんどそこに意味がない。それについて，お前に言いたいことが沢山ある。今僕は1年前には希望するしかなかったこの勇敢な性格と崇高な魂について自信を持っている。僕の生活をごらん。幸福の方法を一緒に探そう。僕たちはいくつかの欠点を直して，独立した財産を持ったら幸せを見つけることが出来ると思うよ。」

(42) CI pp. 212-215 lettre 95 1804年8月20日
Depuis que je suis si heureux, je n'ai qu'une inquiétude, c'est celle de ne pas te voir aussi heureuse que tu le mérites. Je l'ai dit à Mélanie, et elle est bien disposée à t'aimer. Elle sent comme toi, (…)

(43) 「僕たち，お前とメラニー，僕の娘と僕，［マント］は，いつパリで一緒に暮らすことができるだろう。ああ，愛しいポーリーヌ。どんなにか僕たちは幸福だろう。僕はお前が，例えば［マント］と結婚してくれたらと思う。この話をうまくまとめたらお前は何て言うかい。」
同上

(44) CI p. 220 lettre 96 1805年8月22日

M[élanie] brûle de te connaître. Vos âmes se ressemblent tant que vous vous aimerez. Elle a maintenant toutes tes manières de penser et de sentir, la même originalité, les mêmes soubresauts dans la conduite, (…)

(45) 「一昨日，メラニーが思いついたのだけれど，お前はいつか彼［マント］と結婚するかもしれない。彼は気のいい男だし，財産もある。そして，僕と一緒に暮らしていくだろうから。」同上 p. 220

(46) スタンダールは，1805年10月1日付けの手紙（CI pp232-233 lettre 100）で，ポーリーヌに，彼の死後，メラニーの子供の面倒を見てくれるようにと頼んでいる。ジュリアンがレナール夫人にマチルドの産む子供のことを託す場面を我々に思い起こさせる。

(47) J. Rousset は，『形式と表象』（*Forme et Signification, Essais sur les structures littéraires de Corneille à Claudel*, Corti Paris 1986）中で，『新エロイーズ』型書簡小説の形式の中にまず，中心人物 protagonistes を置き，彼らは，何もかも打ち明ける人物を必要とし，それがクレールやエドワール卿であると言っている。クレールがジュリーの最も愛しい人であると同時に confidente であったように，スタンダールにとってのポーリーヌは，confidente という，幾分同性的な役割を担ったことを確認しよう。

(48) *Souvenir d'égotisme* chapVI

(49) スタンダールの女主人公たちは，恋によって強さを持つ女性と，教育によって潜在的に強さを持つ女性があると考える。前者の例は，レナール夫人，エレーヌ，クレリア，後者として，マチルド，ミナ，ラミエルらが考えられる。レナール夫人やエレーヌのように，最初は受け身であった女性も，恋により次第に強さを増し，自分から手紙を書くようになる。ポーリーヌは，教育によって強さを持つにはいたらなかったし，恋の道は，兄によって封じられていた，中途半端な存在であったと言える。また，教育によって強さを持つ女性たちは，主に，主人公（男）の恋人としてよりもむしろ，唯一の女主人公としての地位を占めやすい。その点で，パリでの主人公青年スタンダールと彼が「教育」した女主人公ポーリーヌは，同時に存在し難いことになる。未完に終わった『ラミエル』におけるサンファン医師とラミエルの役割分担の曖昧さを思い出して見よう。

(49) CI p. 308 lettre 130 1806年3月22日